

英語母語話者が語る物語と英語教育での活用

(3) 物語の特徴とマイ・ストーリーの作成

金子朝子

Stories Told by English Speakers and Their Application to English Education in Japan:

(3) Characteristics of the Stories and Creation of New Stories

Tomoko Kaneko

Abstract

This is the third study in a series which explores the possibilities of utilizing stories from the Once Upon a Time Story Corpus as a useful means to teach introductory level English learners in Japan.

Using words, phrases and typical plots frequently employed in the stories based on folk tales or children's stories in the corpus, ways in which English learners and teachers can create their own original stories are discussed. True life stories compiled in the corpus have story specific plots and lexical phrases not suitable for teaching material for beginning level learners and are therefore excluded from the resource. However, the stories based on folk tales or children's stories, which generally follow common plots and use the same lexical phrases repeatedly, will be a rich resource in the development of very effective teaching material in classrooms.

To conclude this study, an example of a story composed with a typical plot and repeated lexical phrases is attached. It is accompanied by a range of learning activities at an introductory level.

1. はじめに

平成 23 年度から小学校 5・6 年生の「外国語活動」が必修化され、日本の英語教育は新しい時代を迎えた。さらに平成 32 年度には 3・4 年生の「外国語活動」と、5・6 年生の英語教科化が完全実施となることと決定している。小・中・高の学習指導要領には、積極的に英語によるコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、コミュニケーション能力を養うことが目的として掲げられている。世界共通語となっている英語によるコミュニケーション能力を養うには、世界のさまざまな英語圏で用いられるバラエティーに富んだ英語のインプットを、入門期から豊富に受けることが重要である。

筆者は主にアメリカ、イギリス、カナダ、オセアニアで、英語母語話者が子供の頃に聞いて今でも覚えている物語を語ってもらい、「世界の英語話者が語る子供の頃によく聞いたお話」(以下、「物語コーパス」)として Web に公開している (<http://aso.swu.ac.jp/corpus/>)。その中で多くの協力者の方々が語った代表的な 2 つの物語、『三匹の子豚』と『赤ずきん』に於ける、使用語彙、レキシカルフレーズ、プロットを分析し、その結果を金子 (2012)、及び金子 (2015) でまとめ、初級レベルの学習者を対象とした英語指導の中で、聞く活動を中心として昔話や童話を導入することの利点を論じ、さら

にさまざまな英語活動への展開可能性を示唆した。

シリーズ (3) となる本研究では、「物語コーパス」に収録された物語を「家族についての語り」と「昔話・童話の語り」に分類し、その語彙や表現の特徴をまとめる。次に、それらのコーパスに見られる典型的な語彙やレキシカルフレーズの使い方やプロットを参考に、教師や学習者自身が自作の物語 (マイ・ストーリー) を創作する活動を具体的に提案する。

筆者もその収集グループの一員である International Corpus of Learner English (ICLE), 及び, Louvain International Database of Spoken English Interlanguage (LINDSEI) の日本人サブコーパスに見られる大学英語上級者の英語使用の特徴を分析 (Kaneko, 2011) した結果, 日本人英語学習者が特に前置詞や冠詞の適切な使用を不得意としていることが明らかとなった。英語を文法的なルールから学ぶのではなく, レキシカルフレーズが豊富に用いられる多くのインプットを聞き, それらをアウトプットとして産出することを可能とする, 物語を中心とした入門期の指導は, 日本人学習者のこうした英語使用上の弱点を補うことに役立つであろう。

2. 物語コーパス

ここでは「物語コーパス」に収集された物語データを分類する。また, 分類ごとの特徴的な使用語彙やレキシカルフレーズの分析を通して, 英語学習の入門期に, 物語を中心とした指導によって, どのような口頭のインプットやアウトプットの機会を学習者に与えられるかを検討する。

2-1. 「物語コーパス」の収集

平成 27 年度 12 月現在の時点で, 「物語コーパス」に収められているデータの収録, 協力者等について表 1 に示す。約 20 分間のインタビュー形式で, 世界主要英語圏の母語話者の協力を得て, 子供の頃によく聞いた英語の物語の語りを録音・記述し, コーパス化した。インタビュー協力者は, 年齢, 地域, 性別のばらつきを考慮して募集・依頼し, 収集したデータは文字化した。カナダで収集したイロコイ連邦 (Iroquois Confederation) に所属するファイブ・インディアン・ネイションズの方々の語りについては文字化の制限があり, 音声のみの収録となっているため, カナダの件数欄には, 文字化されたデータ数を括弧に入れて示した。また, 話者情報や語られた物語に関するエピソードも「物語コーパス」の Web サイト (前掲) に公開した。

表 1. 「物語コーパス」の収集

収録時期	出身地	件数	語り手												
			性別		年齢								話を聞いた年齢		
			M	F	20 以下	20 29	30 39	40 49	50 59	60 69	70 以上	5 以下	6 10	11 15	
H. 22.9 頃	アメリカ	28 件	14	14	2	4	3	5	7	6	1	15	12	1	
H. 23.9 頃	オセアニア	20 件	9	11	4	4	1	1	4	4	2	7	12	1	
H. 24.9 頃	カナダ	8(6)件	6(4)	2	0	0	1	2	2	3	0	5	3	0	
H. 25.9 頃	イギリス	11 件	3	8	2	1	4	4	0	0	0	8	3	0	
計	4 英語圏	67(65)件	32(30)	35	8	9	9	12	13	13	3	35	30	2	

2-2. データの概要と収録した物語の分類

「物語コーパス」に含まれる、英語母語話者から収集した物語には、昔話や童話だけではなく祖父母や父母などの家族の生き方や歴史に関する語りが全件数中 14 件の 20.9% を占め、残りの 53 件が昔話・童話となっている。また、53 件のうち文字化の承認を得られたものは 51 件である。同じ物語が数名の違った英語圏に属する話者によって語られた例もあり、例えば、『三匹の子豚』はアメリカ、オセアニア、イギリス、カナダの協力者によって語られ、昔話・童話総数 53 の 20.8% を、また、『赤ずきん』はアメリカ、オセアニア、イギリスの協力者によって語られ 13.2% を占めている。(表 2, 3 参照)

表 2. コーパスに収められた語りの分類

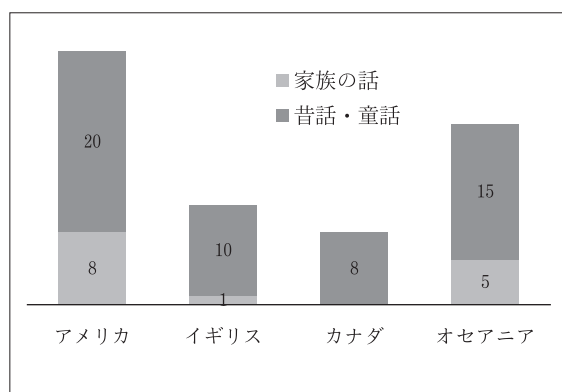
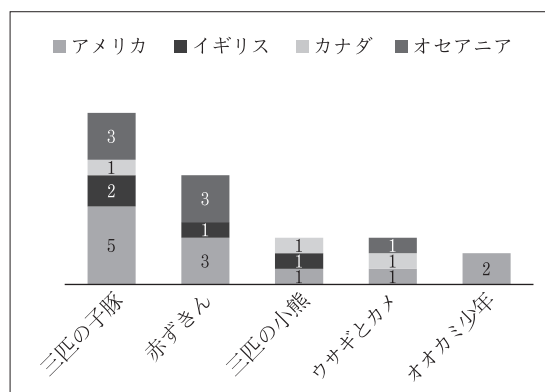


表 3. 複数話者が語った昔話・童話



2-3. データの分析と考察

「物語コーパス」に収集されたデータを、「家族についての語り」と「昔話・童話の語り」に分類し、英語分析ツール WordSmith と Collocate を用いてその特徴を分析した。はじめに、使用語彙頻度、並びに単語連鎖の視点から、2 種類の語りの特徴について検討する。また、語りの物語の特徴を探るために、イギリスのランカスター大学と IBM イギリス科学研究所が、BBC 放送を中心に約 57 万語に及ぶ現代英語の話し言葉を収集した Lancaster/IBM Spoken English Corpus (SEC) の分析結果も参照することとする。

2-3-1. 使用語彙頻度

使用語彙頻度の分析には、WordSmith の機能の一つである WordList を用いた。

表 4. 「家族についての語り」と「昔話・童話の語り」の統計結果

	使用語彙			単語の文字数		一文の長さ
	延べ語数 (Token)	異なり語数 (Type)	Type/Token Ratio	平均文字数	最長文字数	平均語彙数
家族の話	7,439	1,154	15.51	3.88	18	17.85
昔話・童話	24,712	2,108	8.53	3.77	16	17.09

「家族についての語り」と「昔話・童話の語り」の延べ語数中の異なり語数の率 (Type/Token Ratio) を比較すると、「家族についての語り」の方が比率が高く、より豊富な語彙が使用されていることを示している。1 単語の平均文字数、最長文字数とも、「家族についての語り」の方がより高い数値を示しており、1 文に用いられる単語数においても、同様の結果であった。(表 4)

次の表5には、「家族についての語り」と「昔話・童話の語り」に加えてSECに収集されている語彙について、頻度と全使用語彙の中で占める割合を、頻度順に第20位まで示した。

表5. 使用語彙と頻度一覧

N	家族についての語り			昔話・童話の語り			SEC		
	Word	Freq.	%	Word	Freq.	%	Word	Freq.	%
1	AND	483	6.49	THE	1,786	7.26	IN	18,754	3.31
2	THE	300	4.03	AND	1,552	6.28	THE	15,109	2.67
3	TO	205	2.76	HE	587	2.38	TO	7,279	1.29
4	WAS	199	2.68	TO	579	2.34	OF	7,228	1.28
5	MY	193	2.59	A	520	2.10	AND	6,416	1.13
6	A	169	2.27	WAS	456	1.85	A	5,561	0.98
7	UM	161	2.16	SHE	420	1.70	AT	4,181	0.74
8	I	153	2.06	OF	402	1.63	THAT	2,584	0.57
9	THEY	146	1.96	IN	401	1.62	WAS	2,520	0.46
10	OF	126	1.69	SO	346	1.40	FOR	2,312	0.41
11	AH	120	1.61	I	332	1.29	IT	2,072	0.37
12	IN	116	1.56	LITTLE	277	1.12	HE	1,984	0.35
13	SHE	113	1.51	SAID	276	1.12	IS	1,847	0.33
14	THAT	112	1.51	THEY	227	0.94	BE	1,837	0.32
15	SO	86	1.16	THAT	226	0.92	I	1,776	0.31
16	HAD	85	1.14	YOU	224	0.91	AS/ON	1,771	0.31
17	WE	75	1.01	HOUSE	222	0.90			
18	IT	73	0.98	IT	193	0.78	YOU	1,395	0.25
19	MOTHER	71	0.95	WOLF	186	0.75	WITH	1,356	0.24
20	BUT	67	0.90	PIG	185	0.75	BUT	1,341	0.24

表5によって3種類のコーパスの使用語彙上位20位までを比較すると、いくつかの特徴が見られる。まず、すべてのコーパスに共通して使用頻度が高いものとして、定冠詞のtheが挙げられる。定冠詞theはほとんどすべての汎用や多くの特殊コーパスで最上位を占める、英語使用に於ける特徴的な語彙である。第二に、接続詞のandが「家族についての語り」では1位、「昔話・童話の語り」では2位を占めている点が注目される。「昔話・童話の語り」については、従属節を用いずに平易な文体で語ろうとするため、等位接続詞andの使用頻度が高いと考えられる点は金子(2015)で指摘されている。「家族についての語り」では、初めからストーリーの展開が決まっている場合が少なく、語りながら次への展開が自然に決まっていく。そのつなぎことばとして、接続詞のandが多く使われる可能性が高いのではないかと考えられる。第三に、代名詞の使用にも特徴が見られる。「家族についての語り」では5位にmyが、17位にweが抽出されている一方、「昔話・童話の語り」では3位にheが、7位にsheが、16位にyouが抽出されている。家族のことやその歴史を自分を中心として語る場合と、物語に登場する人物や動物について第三者として語る場合の違いが明確に現れている。また、「家族についての語り」では、fatherでなくmotherが、昔話・童話では動物の中でもwolfやpigに人気があることもわかる。

2-3-2. 単語連鎖

単語連鎖は Collocate を用いて分析した。「家族についての語り」、「昔話・童話の語り」の双方共、総延べ語数（それぞれ 7,439 語, 24,712 語）の 0.1% 以上にあたる、「家族についての語り」では頻度 4 以上、「昔話・童話の語り」では頻度 12 以上の単語連鎖の中からレキシカルフレーズと考えられるものを表 6 にまとめた。

表 6. 「家族についての語り」から抽出されたレキシカルフレーズ

連鎖数	頻度	レキシカルフレーズ
2	43	my mother
	30	it was
	29	I was
	25	she was
	21	and then
	17	they were
	15	and so
	14	went to
	13	my father
	12	he was / I think / that was
	10	a little / you know
	8	out of / all of
	7	kind of / of course / tooth fairy / one day / got married
	6	very much / came from
5	come out / their child / talk about / decided that / tried to / United States / get married	
4	told me / many years / very hard / many of / came over / on board	
3	7	a lot of / out of the
	6	when I was
	5	one of the / my great-grand mother
	4	the actual stories / at that time / a story about
4	5	out of the water

表 6 で特徴的であると思われるのは、my mother, my father, my great-grandmother など、語り手との家族関係を示すレキシカルフレーズと got (get) married であろう。また、次の表 7 に示された「昔話・童話の語り」の結果と比較すると、レキシカルフレーズとして抽出された N-gram の数が少ない。これは、話のパターンや筋が一定ではなく、「家族についての語り」として共通のプロットが存在しにくいことが理由であると考えられる。教室内の teacher talk のひとつとして教師自身が自らの家族の話をするのはしばしば見受けられるが、英語学習効果を狙ってレキシカルフレーズを繰り返し聞かせるためには、このテーマは適切とは言えないようである。

「昔話・童話の語り」では、物語それぞれが持つ独特なレキシカルフレーズの繰り返しが多いことが特徴として挙げられる。また、Little Red Riding Hood や Little Ginger Bread Boy のように、タイトルとなっている主な登場人物や動物名などが、そのまま物語の中でも繰り返し用いられること

表 7. 「昔話・童話の語り」から抽出されたレキシカルフレーズ

連鎖数	頻度	レキシカルフレーズ
2	81	little pig
	57	there was
	49	she was
	45	it was / let me
	42	house of / he was / he said
	36	out of
	33	and then
	31	decided to
	30	one day / he puffed
	29	his house
	28	tar baby / little pigs
	27	I will
	26	she said / your house
	25	they were
	24	he blew
	23	to eat / of sticks
	22	went to / of straw / she went
	21	knocked on / had to / he puffed / of bricks
	19	made of / of course
	17	I would / wanted to / there were
16	could not / I think	
15	she tried / she decided / she was / they could	
14	I was / they would / to get / I'll blow / hair of / he saw	
13	would be / and so / I'll puff / come in	
12	lived in	
3	28	on the door
	26	Ginger Bread Boy / let me in
	22	big bad wolf
	16	three little pigs
	13	out of the / one of the / built his house
4	41	Little Red Riding Hood
	21	knocked on the door
	16	my chinny chin chin
	15	once upon a time
	14	Little Ginger Bread Boy
	12	blow your house in
5	17	he huffed and he puffed / I'll puff and I'll blow

も特徴のひとつと言えよう。「家族についての語り」のような個人的な話に比較して、より多くの学習者が同じ話を聞いたことがあるという共通体験を持つことから、導入される物語のあら筋や内容を背景知識として共有している点が、英語指導の教材として特にその効果が期待される所以である。

コミュニケーションと文法学習の関係について、Pienemann (1988) は、学習者は、語彙やレキシカルフレーズは難易度や指導順序に関わりなくいつでも学ぶことができるが、文構造については学習者の中間言語が指導される事項を学ぶことができるレベルに到達していなければ学ばれることはない、と説明する。これはつまり、文構造とは違って語彙や慣用句は、学習者がどの習得レベルにあっても学ぶことができる可能性を示唆していることになる。また Schmitt (2004) も、後に文構造を習得する基礎としてまずレキシカルフレーズを学び、次第に自らそれらを構造的に分析し始めることによって文構造への気づきが促されることを指摘している。このように、英語の文構造を知識として学ぶ前に、豊富なレキシカルフレーズに触れておくことは重要な意味を持っている。中間言語の発達に伴って学習者は段階的に、学ぶ準備ができた文構造を習得していくが、そのメカニズムは、チャンクとしてひとまとまりで使用していたフレーズの構造への気づきがまず起こり、やがてそのフレーズが分析され、文法性が意識されるというものである。この気づきこそが第二言語の習得へと繋がるものであることを Ellis (1994) も強調している。Hunston (2002) らのレキシカル・グラマーでも、レキシカルフレーズを単位とする学習こそが、後の運用力の基礎になることを論じている。こうした視点から、レキシカルフレーズが豊富に用いられる昔話や童話を英語入門期に活用することは、特に目標言語のインプットが限られている日本のような外国語習得の環境では、大変有効な方法であると考えられる。

2-3-3. プロットの特徴

「家族についての語り」のプロットは、〈導入〉、時系列の〈歴史〉、〈現在〉の状況とまとめ、の順に語られていることが特徴として挙げられる。データの中から3話を例として、そのプロットを表8にまとめた。

表8. 典型的な「家族についての語り」のプロット

		イギリス 物語 No. 7	オセアニア 物語 No. 15	アメリカ 物語 No. 2
1	導入	私が小さい頃、父との出合いを母が私に話してくれた。	5人の子供がいる家に生まれ、自分は幸せだったと思う。	嘘をつかず、真実を話す方が良いということを母の話から教えられた。
2	歴史	両親は高校で出合い、結婚。祖父は事業に成功し、イギリス王女が宿泊したことのあるようなスコットランドの豪邸に住み、次にウェールズに両親と共に住んだので、私もそこを訪ねることがあった。	子供の頃にはテレビなど無かったが、素晴らしい自然に囲まれ、母は童話をよく読んでくれた。でも外にいるのが好きだった私は、牛や馬の世話を喜んでした。祖母たちが時々訪ねてくれるのが、とても楽しみだった。	母が子供の頃、家庭は貧しかった。祖母が外出している間にパンを焼こうとしたがイーストが上手く発酵せず、それを隠すために庭に埋めてしまった。次の日、太陽が昇ると土の中でイーストが発酵して、鶏が突つき、隠していたことが発覚してしまった。
3	現在	今でもその頃の写真を見ると、懐かしく昔を思い出す。	今振り返ってみると、農場にいた頃がこれまでで一番楽しかったと思う。	本当のことを言うことが一番だ、という母の教えは今でも大切にしている。

一方、「昔話・童話の語り」の基本的なプロットの特徴は、〈行って〉、新しいことを〈経験して〉、成長して〈帰ってくる〉(瀬田, 1980) に集約することができる。

表9は、「物語コーパス」の中の「昔話・童話の語り」のデータの中で、複数の話者に語られた物

語3話の分析を行ったものである。『三匹の子豚』は18世紀の後半以降にそれまでイギリスを中心に語り継がれていた民話に基づいて出版されたものである。物語そのものはそれよりずっと昔から語り継がれてきたと考えられている。タイトルの欄に*印のある『赤ずきん』と『ウサギとカメ』は、*The Types of the Folktale: A Classification and Bibliography* (Aarne & Thompson, 1981) の分析を参照し、そこに分類されている物語番号を示した。同書は1910年に初版が発行されて以来、継続して物語の収録数を増やして、世界のさまざまな国の数多くの民話や昔話2,400余りを、動物の物語、民話、逸話等の大分類のもと、さらにその話の内容を下位区分して解説したものである。『赤ずきん』は「一般的な民話」の中の「魔法の話」の下位区分「超自然的な敵」のグループに分類され、「大ぐらい」の話のはじめに紹介されている。狼に食べられるが救出される話として、世界で30話近くに及ぶ類似した話が認められている。また、『ウサギとカメ』は「動物の話」の中の「野生動物」、「家畜」、「鳥」、「魚」以外の「動物」に分類され、『キツネとザリガニ』から派生した話で、足の速い動物と遅い動物の競争で、足の速い方が途中で寝てしまい、足の遅い方に負ける話として紹介されている。アイヌやチェロキー族の民話も含めて、世界で10話程度の類似した話が認められている。

表9. 行って帰ってくるプロット

タイトル プロット	三匹の子豚	赤ずきん *(333) (グリム版)	ウサギとカメ *(275A)
行って	成長した三匹の子豚の兄弟は、母親から自分の家を自力で建てるように言われる。	母親に頼まれて森の向こうに住むおばあさんの家にお菓子を届けるために家を出る。	ウサギに歩みの鈍さをバカにされたカメは、かけっこの勝負を挑む。
経験して	兄達は簡単な藁や木の家を建て、狼に吹き飛ばされてしまうが、弟は苦労をしてブロックの家を建て、狼を追放する。	狼に騙されておばあさんの家を教えてしまい、先回りされ、おばあさんも自分も狼に食べられてしまう。	ウサギはカメが鈍いので途中で居眠りし、ウサギが目覚めた時には、カメはゴールで大喜びしていた。
帰ってくる	勤勉は報われることを学んだ兄弟は、弟の家で仲良く幸せに暮らす。	狼に気づいた猟師が狼の腹を切り、二人を助け出す。赤ずきんは、言いつけを守ることの大切さを学ぶ。	カメは、油断せずに着実に歩んだことが、成功をもたらしたことを確信する。

昔話・童話では、常に主人公にスポットが当てられ、同じ場面を同じ言葉で繰り返し、話の筋が明確にテンポよく物語の結末へと向かうという特徴があると小澤(1999)は説明する。語りの物語や昔話の特徴として、語り手による脚色が増えられる点も指摘することができる(金子, 2012, 2015)が、基本的なプロットは大きく変わることはない。

以上の「物語コーパス」の分析と考察を基に、第3章では、「昔話・童話の語り」に見られる特徴を活かして入門期の英語指導に役立つ物語を創作し、それを利用した活動例を検討する。

3. 入門期英語指導教材の作成


学習教材として語りや読み聞かせの物語を活用することの利点は、学習者がその物語に用いられている独特の言い回しに触れ、同じ表現を繰り返し聞き、語り手が作り上げる英語の音とリズムを楽しむことにある。そのため物語は、学習者が積極的に英語を聞こうとする意欲を高めてくれる。加えて、英語の物語を絵本教材として活用することで、単に語られる物語を楽しむだけでなく、学習者それぞれが基本的なプロットに独自の創造的な味付けを加えることが可能であり、さらに、コミュニ

ケーションとしての英語への拡がりを図って、学習者に劇として演じさせることもできよう。このように物語やその絵本は、単に「聞く」活動のための教材として終わるのではなく、能動的な活動へと展開させることができる。


以下は、物語の構成の基本である<行って>、<経験して>、<帰ってくる>というプロットに基づいて著者が創作した、学習教材として使用するためのサンプルとなる物語、*Toby's Friends*である。この物語は、簡単な挨拶と動詞 (walk, skip, jump, sleep) の使い方に加えて、「～が好き」の表現 (like(s) to+V) を指導することを目的としている。絵本教材が、学習者の想像力を掻き立て、それぞれが自分の物語を創作したり、劇として演じたりする指導も可能となることの一例として、その活用についても検討したい。

3-1. 絵本教材: *Toby's Friends*


Toby's Friends





① Toby likes to walk. "Good morning, Miss Daisy," he said.

"Good morning, my friend," the daisy said. 


② Toby likes to skip. "Hello, Mr. Grasshopper," he said.

 "Hello, my friend," the grasshopper said.


③ Toby likes to jump. "Good afternoon, Mrs. Butterfly," he said. 

"Good afternoon, my friend," the butterfly said. 

④ Toby likes to run. "Hi, Miss Puppy," he said.

 "Hi, my friend," the puppy said.

⑤ Toby likes to sleep. "Zzzz..., Zzzz..., " he said.



"I love my friends..., Miss Daisy, Mr. Grasshopper, Mrs. Butterfly, and ... Zzzz ... Zzzz ... Miss Puppy. Zzzz..."

3-2. *Toby's Friends* に基づいた活動例

以下に示す活動は概ね、指導する順序に従って説明を加えている。

基礎

(1) 絵本を見る: 絵と Total Physical Response (TPR) を利用して語彙を学ぶ。

例: TPR で新出語彙の指導

教師: walk, skip, jump, sleep と言いながら、その動作を繰り返し示す

子供: 教師の walk, skip, jump, sleep の指示で動作を行う

教師: 語彙の提示の順番を入れ替えて子供に動作を行わせ、その後、子供が自然に単語を発話するようになったのを見計らい、子供に動作の指示をさせる

(2) 物語を読み聞かせる: 絵本を繰り返し読み聞かせる (例は前掲 Web サイト「世界の英語話者が語る子供の頃によく聞いたお話」<http://aso.swu.ac.jp/corpus/> を参照)。時には教師がアドリブを入れて話す。

例: 教師の読み聞かせ

1 回目: 少しゆっくりと大げさな抑揚をつけて、(1) で学んだ新出語彙をできるだけ明確に発音しながら読み聞かせる。(1) の TPR に続いて行う場合は、子供が物語の進行にあわせて動作を付けてもよい。

2 回目以降: 子供の興味を引くようなページの開き方 (たとえば、少しずつ次のページの絵を見せながら、子供に次の話の展開を想像させる) などを工夫しながら、数回繰り返して読み聞かせ、最終的には普通の速さで読んで聞かせる。

発展

(3) ジャズ・チャンツ: 絵本に出てくる「～が好き」のフレーズ (like(s) to+V) をジャズ・チャンツの手法でリズムをとりながら繰り返し練習させる。次に物語の Section 1 から 5 までをジャズ・チャンツの伴奏にあわせて語って聞かせる (前掲 Web サイト参照)。

(4) 歌: この物語を歌の伴奏に合わせて歌い、同上のフレーズを練習する (前掲 Web サイト参照)。初めは教師も参加して、目標としているフレーズのみを子供が歌い、定着後はその他の部分も子供だけで歌う。

(5) 物語への一部参加: Toby や Toby の友達の挨拶の部分、また、基本的な挨拶の部分のみの語りに子供を参加させる。

(6) Toby 役での物語への一部参加: Toby が好きなこと (I like to walk, I like to skip 等) を子供が言う。

(7) ロール・プレイ: 物語に登場する Toby や Toby の友達の対話を子供が行う。展開 2 の劇のための導入ともなる。

展開 1 マイ・ストーリーの作成

(8) 子供に好きな犬の名前をつけさせ、その名前を使って教師が絵本を読み聞かせる。

(9) 犬が他にどんなことが好きかを想像させ犬の活動を増やすことで、子供と一緒に物語を膨らま

せる。

(10) 子供に自分の好きな名前をつけた犬の話を1セクションずつ話させる。

(11) 子供に、「～が好き」のフレーズ (like(s) to+V) を使って、自分のことを話させる。また、Do you like to ~? の疑問文とその答え方も練習する。

展開2 劇を演じる

(12) 教師、または、子供がナレーターとなり、その他の配役を子供が行う。子供の自作の物語に基づいたシナリオを作成することで、同様のプロットでも少しずつ違った内容や、使用語彙、フレーズが盛り込まれた劇が出来上がる。

4. おわりに

本研究は、「物語コーパス」の分析結果に基づき、入門期の英語指導に役立つ教材として、*Toby's Friends* とそれに伴う活動例の作成を試みたものである。前述の Web サイトには、この物語を基に、教師や学習者が気軽にマイ・ストーリーを作成できるテンプレート2例も提示した。今後は、入門期の指導を目的としたものばかりでなく、より複雑な物語のプロットを取り入れて、小学校高学年、中学の英語指導にも役立つレキシカルフレーズの学習に焦点を置いた物語を継続して創作したい。また、それらの物語を基に、マイ・ストーリーの作成へと繋がる活動をさらに研究し、Web上に掲載していきたいと考えている。

* 本研究は、科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 22520630 「英語話者の物語コーパス作成とレキシカルフレーズ中心のリスニング教材の提供」及び課題番号 15K02729 「英語母語話者の物語コーパスに基づいた慣用句を中心とした絵本教材の作成と提供」による研究の一部である。

参考文献

- Aarne, A. & S. Thompson (1981). *The Types of the Folktale: A Classification and Bibliography*. FF Communications No. 184. Suomalainen Tiedekatemia. Helsinki: Finland.
- Ellis, R. (1994). *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Hunston, S. (2002). *Corpora in Applied Linguistics*. Cambridge University Press.
- Kaneko, T. (2011). What Some Studies on ICLE/LINDSEI Japanese Sub-Corpora Show. *Gakuen*, No. 846. Tokyo: Showa Women's University.
- Pienemann, M. (1988). Determining the influence of instruction on L2 speech processing, *AILA Review* 5/1: 40-72.
- Schmitt, N. (eds.) (2004). *Formulaic Sequences: Acquisition, Processing, and Use*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 小澤俊夫 (1999). 『昔話の語法』東京: 福音館書店
- 金子朝子 (2012). 「英語母語話者が語る物語と英語教育での活用 (1) 『三匹の子豚』」『学苑』858号
- 金子朝子 (2015). 「英語母語話者が語る物語と英語教育での活用 (2) 『赤ずきん』」『学苑』894号
- 瀬田貞二 (1980). 『幼い子の文学』東京: 中央公論新社

(かねこ ともこ 英語コミュニケーション学科)